病理的自己愛目録日本語版 (PNI-J) の作成^{1, 2}

川崎 直樹 日本女子大学 小塩 真司 早稲田大学

Reliability and validity of the Japanese version of the Pathological Narcissism Inventory

Naoki Kawasaki (Japan Women's University) and Atsushi Oshio (Waseda University)

The Pathological Narcissism Inventory (PNI), consisting of 7 sub-scales, was developed to comprehensively assess the components of narcissism, including not only grandiose but also vulnerable aspects. The purpose of this study was to develop the Japanese version of the Pathological Narcissism Inventory (PNI-J) and to examine its factor structure, reliability, and validity in the Japanese population. The results from 402 participants showed that the PNI-J has a factor structure that is nearly equivalent to the original PNI. Furthermore, the PNI-J had good test-retest reliability, and had a theoretically reasonable correlation with self-, interpersonal-, and personality-related variables. Additionally, the Japanese version of the Brief-Pathological Narcissism Inventory (B-PNI-J) was constructed based on previous research, demonstrating nearly the same properties as the full version. Thus, the PNI-J and the B-PNI-J can reflect the pathological features of narcissistic people in the Japanese population more comprehensively than other conventional measurement scales of narcissism.

Key words: Pathological Narcissism Inventory, grandiosity, vulnerability.

The Japanese Journal of Psychology

2021, Vol. 92, No. 1, pp. 21-30

J-STAGE Advanced published date: March 31, 2021, <https://doi.org/10.4992/jjpsy.92.19217>

自己愛パーソナリティの測定尺度として世界で最も広く利用されてきたのは、Raskin & Hall (1979) の自己愛人格目録 (Narcissistic Personality Inventory: 以下、NPI とする) である。NPI は「私は、才能に恵まれた人間であると思う」などの項目からなり、自己愛的な誇大性を反映した尺度である。しかし自己愛パーソナリティは誇大性だけでなく、脆弱性や過敏性としても現れることが広く指摘されており (Cain, Pincus, & Ansell, 2008; Gabbard, 1989; Ronningstam, 2005), それを適切に反映できる尺度が必要とされる。

また NPI の尺度得点は概して、精神的健康の良好さを表す指標と正の相関関係を示しやすい。例えば、

抑うつや不安の低さとの関連 (Sedikides, Rudich, Gregg, Kumashiro, & Rusbult, 2004) の他、自尊感情についてはメタ分析の結果として .30 から .40 程度の正の相関が見られている (岡田, 2009)。NPI は元々、自己愛性パーソナリティ障害の概念を基に構成されている (Raskin & Hall, 1979) が、その障害や病理としての側面が調査結果に反映されにくいことは、大きな課題のひとつと言える。

こうした背景を受けて、Pincus et al. (2009) は病理的自己愛目録 (Pathological Narcissism Inventory: 以下、PNI とする) を作成した。他の尺度に比べこの尺度は、自己愛の病理性をより反映しながら、誇大性と脆弱性を包括的に測定できるという特徴を持つ。自己愛は広義には、自己イメージを肯定的に維持しようとする欲求や、それを満たすための自己制御や感情制御の能力のことをいい、それ自体はすべての人に備わっているものである (Pincus, 2013; Ronningstam, 2005)。そして病理的自己愛は、その肯定的自己イメージに対する脅威や失望などに対して、不適応的な方略をとったり制御不全を起こしたりすることの特徴とする (Pincus, 2013; Pincus et al., 2009)。

Correspondence concerning this article should be sent to: Naoki Kawasaki, Faculty of Integrated Arts and Social Sciences, Japan Women's University, Mejirodai, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8681, Japan. (E-mail: kawasakin@fc.jwu.ac.jp)

¹ 本研究は科学研究費補助金 (若手研究(B), 課題番号 24730587) の助成を受けた。

² 本研究結果の一部は、日本心理学会第 79 回大会 (2015) ならびに日本パーソナリティ心理学会第 24 回大会 (2015) で発表された。

Table 1
病理的自己愛の下位因子と仮定される因子構造

因子	定義 (Pincus et al., 2009)	上位因子 (Wright et al., 2010)		
		モデル 1	モデル 2	モデル 3
誇大空想	成功や賞賛や承認を得るという補償的な空想にとらわれること	単一因子	誇大性	誇大性
自己犠牲的自己高揚	過度に肯定的な自己イメージを保持するために利他的な行為を意図的に行うこと	単一因子	脆弱性	誇大性
搾取性	操作的な対人志向性	単一因子	誇大性	誇大性
権威的憤怒	特権意識に基づく期待が満たされなかったときに生じる怒り感情	単一因子	誇大性	脆弱性
随伴的自尊感情	自尊感情の著しい変動の感覚と、賞賛や承認という外的供給源がない時に制御不全となるという自覚があること	単一因子	脆弱性	脆弱性
脱価値化	必要とされた賞賛をしてこない相手に無関心になり、期待外れの相手からの承認を必要としていたことを恥じること	単一因子	脆弱性	脆弱性
自己隠蔽	他者に対して自分の失敗や欲求を見せないようにすること	単一因子	脆弱性	脆弱性

その病理的自己愛は、誇大性と脆弱性という2つの表現型として表れる。自己愛的な誇大性は、利己的な信念を持ち不適応的で補償的な自己高揚方略をとることを特徴とし、自己愛的な脆弱性は、自己高揚の失敗や特権的期待の失望によって自己制御や感情制御の不調を示すことを特徴とする (Pincus, 2013; Pincus et al., 2009)。近年の自己愛性パーソナリティ障害の診断基準 (例えば、American Psychiatric Association, 2013) が誇大性に狭く焦点化されており、脆弱性への注目が少ないことはしばしば批判を受けるところであるが (Cain et al., 2008; Caligor, 2013; Pincus et al., 2009; Ronningstam, 2005)、PNI が捉える病理的自己愛の概念は、より包括的なものとなっていると言える。

実際の PNI の作成に際しては、臨床教員 (clinical faculty) や心理療法士などからなるテスト構成チームが、理論的研究および実証的研究に関するレビューや事例に基づく議論なども踏まえて、病理的自己愛を7側面に概念化している。考案された項目原案は、概念の内容的な関連性などについて別チームによる評価がなされ、項目の選別や表現の精査がなされた。最終的には、因子分析等の結果を踏まえ、7因子52項目の尺度として構成されている (Pincus et al., 2009)。なお尺度の開発に際しては、一般群だけではなく臨床群のデータも用いられている。PNI は自殺念慮や自殺企図、他者殺害念慮などとも関連が示されており、自己愛の病理的・不適応的な側面を反映できる尺度となっている (Pincus et al., 2009)。

こうして開発された PNI は、近年多くの研究に利用されるようになっていく。例えば、自己報告によるストーキング行為 (Ménard & Pincus, 2012) や、抑うつ (Dawood & Pincus, 2018; Tritt, Ryder, Ring, & Pincus, 2010)、戦時下の急性ストレス反応 (Besser, Zeigler-Hill, Pincus, & Neria, 2013)、自傷行為 (Dawood, Schroder, Donnellan, & Pincus, 2018) など、様々な心理的問題と

の関連が示されている。また、メンタルヘルス機関のサービス利用の少なさとの関連も報告されており (Ellison, Levy, Cain, Ansell, & Pincus, 2013)、精神的健康のリスク要因として重要であることが示唆されている。

このように、心理的問題を自己愛という観点から検討する上で、PNI は有用な尺度である。本研究ではこの PNI の日本語版 (Japanese version of Pathological Narcissism Inventory: 以下、PNI-J とする) を作成し、因子構造の確認と妥当性・信頼性の検討を行うことを主な目的とする。なお、日本語版の作成にあたっては、主に3点の検討が必要である。1点目は因子構造、2点目は妥当性と信頼性、3点目は短縮版の作成である。

因子構造について

PNI の因子構造は、誇大空想、自己犠牲的自己高揚、搾取性、権威的憤怒、随伴的自尊感情、脱価値化、自己隠蔽の7因子からなる。各因子の概念上の定義 (Pincus et al., 2009) は Table 1 に示すとおりである。

PNI が初めに提案された Pincus et al. (2009) の論文では、誇大空想、搾取性、権威的憤怒の3因子が自己愛的誇大性、自己犠牲的自己高揚、随伴的自尊感情、脱価値化、自己隠蔽の4因子が自己愛的脆弱性を反映するように概念化されている (Table 1)。しかし Pincus et al. (2009) では、この誇大性と脆弱性を高次因子とする確認的因子分析の結果が報告されていなかった。それをうけて、Wright, Lukowitsky, Pincus, & Conroy (2010) は PNI の高次因子に関する新しいモデルの提案と検証を行っている。この新モデルでは、誇大性の高次因子に対して搾取性、自己犠牲的自己高揚、誇大空想が負荷し、脆弱性の高次因子に対して随伴的自尊感情、脱価値化、自己隠蔽、権威的憤怒が負荷する形が提案されている (Table 1)。Wright et al. (2010) は確認的因子分析を行い、病理的自己愛という単一の高

次因子を想定するモデル1およびPincus et al. (2009)から示唆されるモデル2と比較して、上記の新しいモデル3がより高い適合度を示すことを確認した。本研究においても、PNI-Jの因子構造を確認する際には、Wright et al. (2010)と同様に3つのモデルに基づいた確認の因子分析を行い、その適合度の比較を行うこととする。

妥当性の検証について

PNIは先述のように複合的な概念に基づく尺度であることから、その妥当性については、複数の基準からの検証が求められる。

既存の自己愛尺度との関連 自己愛尺度として最も一般的なNPIは、自己愛的パーソナリティ構造を同じく反映しているという点でPNIとの中程度の関連が予測され、実際に両者には正の相関関係($r=.13$)が報告されている(Pincus et al., 2009)。本研究でも同様の結果が見られるかを確認する。またNPIが自己愛の誇大性を主に反映する一方、自己愛の過敏性を表す尺度(例えば、Hendin & Cheek, 1997)もまたPNIと全般的に正の関連を示すことが確認されている(Pincus et al., 2009)。日本では中山・中谷(2006)が、他者からの評価への過敏性に注目して、自己愛的な誇大性と評価過敏性を2次元で測定する尺度を作成している。そこで本研究では特に評価過敏性に注目し、関連を確認する。

自己に関連する感情との関連 自己愛パーソナリティは自己に関する感情やその調整の仕方に特徴が表れる(Ronningstam, 2005)。そのため、NPIとPNIの相違性も自尊感情や恥感情との関連にあらわれる(Pincus et al., 2009)。NPIは自己愛の健康的な側面を反映しやすいため、自己に関する感情は肯定的であり、自尊感情との正の相関、恥の感情との負の相関が予測される。対照的に、PNIは病理的な特徴をより反映するため、自尊感情との負の相関、恥感情との正の相関が予想される。実際に、Pincus et al. (2009)はこれに一致した結果を示していることから、本研究でも自尊感情と恥感情について同様の関連が見られるか検討を行う。

またPNIは、自尊感情の調整の仕方を反映した尺度とも関連が予測される。PNIは下位尺度に、自尊感情の変動を意味する「随伴の自尊感情」や、自尊感情を脅かす他者に対する「脱価値化」など、自尊感情の調整不全を表す特徴を含んでいる。これらは、自尊感情が外的評価や達成や期待に随伴している傾向を表す自己価値の随伴性(Paradise & Kernis, 1999)や、「自分の実績とは関係なく、他者を低く評価することで得ようとする有能さの感覚」を表す仮想的有能感(速水・木野・高木, 2005)と関連すると考えられる。特に、自己価値の随伴性はPNIの下位尺度の随伴性自尊感

情と関連し、仮想的有能感は「他者軽視」の尺度とも言い換えられる(速水他, 2005)ことから、PNI下位尺度の脱価値化と関連することが予測できる。

対人関係に関する変数との関連 自己愛パーソナリティの病理や障害は、自尊感情などの内的過程だけではなく、対人関係の不調和にも強く反映される(Cheek, Kealy, Joyce, & Ogrodniczuk, 2018)。病理的自己愛においても、その特権意識の強さや自己中心性由来して、対人関係における攻撃性や、不誠実な対人操作傾向が表れると考えられる。特にPNIの下位尺度の権威的憤怒は攻撃性と、搾取性は対人操作傾向との関連が予測できる。

他のパーソナリティ変数との関連 自己愛の病理と関連が深いと言われるのがサイコパシーである(Ronningstam, 2005)。サイコパシーとは、利己性、冷酷性、希薄な感情、無責任、衝動性、表面的魅力などの特徴を有するパーソナリティ障害である(Cleckley, 1976)。自己愛とサイコパシーはマキャベリアニズムとともに「ダークトライアド」と評される共通性のある概念である(Paulhus & Williams, 2002)。PNIが自己に関心が集中しがちで利己的・攻撃的になる傾向を表していることから、サイコパシーとの関連が予測できる。

またPincus et al. (2009)は、病理的自己愛は境界性パーソナリティに近い特徴を持つことを指摘している。両者は原始的防衛機制であるスプリッティングを共通して用いられる(Caligor, 2013)ことを受け、本研究ではスプリッティングの機制と類似した二分法的思考(Oshio, 2012)との関連を検討する。二分法的思考は、「白か黒か」、「全か無か」など物事を二項対立的に考えようとする志向性を表しており、境界性と自己愛性のパーソナリティ障害傾向との関連がすでに示されている(Oshio, 2012)。そこで、二分法的思考との関連がPNI-Jにおいても見られるかを確認する。

なお近年のパーソナリティ障害の概念は、パーソナリティ全体を5つの次元で捉えるBig Fiveモデルとの対応づけが試みられている(Trull & Widiger, 2013)。自己愛パーソナリティ障害の傾向に関してもBig Fiveとの関連が検討されており、主に外向性の高さと協調性の低さと関連することなどが報告されている(Saulsman & Page, 2004)。本研究でもPNI-JとBig Five特性との関連を検討し、そのパターンを比較することとする。

短縮版の作成

PNIは全52項目と、項目数が比較的多い尺度である。そのため、より簡便なツールとして、短縮版であるBrief-Pathological Narcissism Inventory(以下、B-PNIとする)が提案されている(Schoenleber, Roche, Wetzel, Pincus, & Roberts, 2015)。B-PNIは、7つの各因子につ

き各 4 項目を採用した全 28 項目で構成されており、おおよそ 52 項目版と同様の特徴を持つことが確認されている。本研究でも今後の簡便な測定を視野に入れ、B-PNI と同じ項目で作成した PNI-J の短縮版 (Japanese version of Brief-Pathological Narcissism Inventory: 以下、B-PNI-J とする) についても検討を行うこととする。

方 法

被調査者と手続き

ウェブ調査会社である株式会社クロスマーケティングを通して調査を実施した。対象者は 402 名 (男性 189 名, 女性 213 名, 平均年齢 39.2 歳 ($SD = 11.04$, 最大値 17 歳—最小値 59 歳)) であった。なお下記の質問紙のうち PNI-J と NPI は全対象者に実施し, その他の尺度は対象者を第 1 のグループ ($N = 199$) と第 2 のグループ ($N = 203$) に分けてそれぞれ実施した。さらに再検査信頼性の検証のため PNI-J については約 2 ヶ月後の追跡調査も行い, 全対象者のうち 158 名から回答を得た。

調査内容

病理的自己愛尺度日本語版 (PNI-J) 病理的自己愛尺度を日本語に翻訳した 52 項目を用いた。翻訳にあたっては, まず筆者ら 2 名による邦訳原案を作成し, 予備調査を行って表現の調整を行った。その項目を和英翻訳の専門家 2 名がそれぞれ英語にバックトランスレーションを行い, 内容について原著者に確認を受けた。原著者からのフィードバックを受け, 再度, 表現を調整後, 最終版を作成した。「自分にはまったくあてはまらない」から「自分にとってもあてはまる」の 6 件法で回答を求め, それぞれ 0 点から 5 点とした。

自己愛人格目録 (NPI) Raskin & Hall (1979) の NPI を基に小塩 (1998) が作成した日本語版尺度である自己愛人格目録短縮版を用いた。優越感・有能感, 注目・賞賛欲求, 自己主張性の 3 下位尺度からなる。全 30 項目に 5 件法で回答を求めた。

邦訳版マキャベリアニズム尺度第 4 版 対人的な操作傾向を表すマキャベリアニズムの尺度 (Christie & Geis, 1970) の邦訳版 (中村他, 2012) を用いた。全 20 項目に 7 件法で回答を求めた。

日本語版一次性・二次性サイコパシー尺度 Levenson, Kiehl, & Fitzpatrick (1995) の尺度の日本語版 (大隅・金山・杉浦・大平, 2007) を用いた。全 26 項目に 4 件法で回答を求めた。

日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 Buss & Perry (1992) の攻撃性質問紙の日本語版 (安藤他, 1999) を用いた。全 24 項目に 5 件法で回答を求めた。

評価過敏性-誇大性自己愛尺度 自己愛を評価過敏性と誇大性の両面で測定する中山・中谷 (2006) の尺

度を用いた。全 18 項目に 5 件法で回答を求めた。

日本語版 Ten Item Personality Inventory Big Five 特性を 10 項目で測定する Gosling, Rentfrow, & Swann (2003) の尺度の日本語版 (小塩・阿部・カトロニ, 2012) を用いた。全 10 項目に 7 件法で回答を求めた。

自尊感情尺度 Rosenberg (1965) の自尊感情尺度の日本語版 (山本・松井・山成, 1982) を用いた。全 10 項目に 5 件法で回答を求めた。

自己価値の随伴性尺度 Paradise & Kernis (1999) の Contingent Self-Esteem Scale の日本語版 (伊藤・小玉, 2006) を用いた。全 15 項目に 5 件法で回答を求めた。

仮想的有能感尺度 Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan (2009) の作成した仮想的有能感の尺度 (Assumed-Competence Scale 2nd version) を用いた。全 11 項目に 5 件法で回答を求めた。

恥尺度 恥と罪悪感を測定する Harder & Zalma (1990) の Personal Feelings Questionnaire-2 を大西 (2008) が翻訳したものから, 恥尺度 (shame scale) のみを用いた。全 10 項目に 5 件法で回答を求めた。

結果と考察

因子構造の検討

Wright et al. (2010) が提案した因子モデル (モデル 3) に準じて, Table 1 にある 7 つの下位因子と, 誇大性と脆弱性の 2 つの上位因子を想定し, 確認的因子分析を行った。なお, パラメータの推定にあたっては, ブートストラップ法を行い, 1,000 回の標本抽出を行って 95 % 信頼区間における上限値と下限値を算出した (Table 2)。その結果, 各項目から各下位因子に対して仮説どおりの影響関係がみられた。適合度については, $\chi^2 = 3448.05$, GFI = .722, AGFI = .698, NFI = .684, CFI = .773, RMSEA = .066 (90%CI: .068—.063) であった。全体的にやや低い値であったが, 観測変数が多いときに GFI などの適合度は小さく出やすく, RMSEA を見るのが重要となるといった指摘 (例として, 豊田・真柳, 2001) も踏まえ, モデルは許容可能であると判断した。

また Wright et al. (2010) と同様の手続きでモデルの比較を行った。7 下位因子が病理的自己愛という 1 つの高次因子に負荷するモデル 1 と, Pincus et al. (2009) に準じ 2 つの高次因子を想定するモデル 2 と, それを改変した Wright et al. (2010) のモデル 3 との適合度を比較した。その結果, Table 3 に示したようにモデル 3 の適合度が最もよい値を示した。以上から, 日本語版においても Wright et al. (2010) と同様の因子構造を採用できると考えられた。上記の因子分析結果に基づき, 7 下位尺度得点の他, 2 つの高次因子に基づく誇大性・脆弱性の得点, そして全体合計得点を算出した。

Table 2
 確認的因子分析（ブートストラップ法）の結果

	全項目				短縮版項目 ^a			
	負荷量	下限	上限	確率	負荷量	下限	上限	確率
誇大性								
自己犠牲的自己高揚 (.97/.92)								
43 私が人の手伝いをするのは、自分が良い人間であることをわかってもらうためだ	.67	.57	.75	.003				
39 私は自分を犠牲にしても、自分がどれだけ良い人間であることを示そうとするほうだ	.67	.58	.75	.002	.65	.56	.73	.002
33 自分を頼ってくれる人と友達になるのは、自分が重要な人物に感じられるので好きだ	.62	.52	.70	.003	.64	.52	.73	.002
25 他の人のために犠牲になることで、自分はその人たちより優れた人間だと感じられる	.59	.48	.69	.003	.63	.51	.72	.003
22 人が私を頼ってきた時、自分が重要な存在だと感じられる	.56	.46	.64	.003	.55	.45	.64	.003
6 私は他の人の世話をするので、いい気分になれる	.36	.24	.49	.002				
誇大空想 (.65/.64)								
45 私はよく、自分の偉業が認められるという空想をする	.86	.81	.90	.003	.87	.82	.91	.002
42 私はよく、自分がヒーローのような行いをしている空想をする	.78	.70	.83	.003	.80	.72	.86	.002
31 自分の努力が賞賛されることをよく空想する	.73	.67	.79	.003	.72	.65	.78	.003
14 私はよく、自分が周りの世界に大きな影響を与えているという空想をする	.70	.62	.76	.003				
26 私は、自分にはほとんどできないようなことを成し遂げる空想をよくする	.69	.61	.76	.002	.69	.60	.77	.003
1 私は、自分がほめられたり尊敬されたりしている姿をよく空想する	.60	.51	.67	.003				
49 私は世界中の人々に認められる一流の人間になりたいと思う	.49	.38	.58	.002				
搾取性 (.48/.45)								
10 誰に対しても、私の思うように物事を信じさせることができる	.78	.70	.84	.003	.79	.70	.86	.003
15 人をうまく操るのは難しくないと思う	.73	.64	.79	.003	.72	.63	.79	.003
4 私は、たいていのことは口のうまさで乗り切ることができる	.65	.55	.72	.002	.65	.56	.73	.002
35 みんな、私の話を聞くのが好きに思う	.54	.44	.64	.002				
23 私は他の人の考えや気持ちを見抜くことができる	.53	.43	.62	.002	.53	.44	.63	.002
脆弱性								
特権的憤怒 (.83/.88)								
12 私が言ったこと・したことに、興味をもってもらえないとイライラする	.77	.70	.83	.002	.70	.60	.77	.002
37 自分の素晴らしさを人がわかってくれないと、いらだちを感じてしまう	.76	.70	.82	.002	.81	.75	.86	.003
18 自分が欲しいものを人から得られないと、とても腹が立つほうだ	.76	.70	.81	.003	.74	.66	.80	.003
52 他の人が私の意見に賛成しないと、とても怒りを感じてしまうことがある	.71	.63	.78	.002				
11 自分がしてあげたのに相手が気付かないと、頭にすることがある	.69	.59	.76	.002				
20 自分が他の人に何かをしてあげるときには、その人が自分にも何かしてくれることを期待する	.65	.57	.72	.002				
29 私は人から批判されると怒りを感じる	.57	.48	.64	.003				
38 自分が得るべきものをすべて手に入れるまで、私は満足できないだろう	.52	.43	.61	.002	.56	.46	.64	.003
自己隠蔽 (.70/.72)								
28 心のなかで感じている自分の弱さを他人に見せるのは耐えがたいことだ	.68	.59	.76	.003	.62	.52	.70	.002
50 私の願望が他の人に知られてしまうと、私は不安で恥ずかしい気持ちになる	.67	.55	.76	.002	.72	.61	.81	.003
46 自分が弱いと感じられてしまうので、人に頼ることには耐えられない	.63	.52	.72	.003	.60	.47	.70	.004
9 人から依存的で甘えてしていると見られるのが怖いので、自分の要望を言わないでいることがよくある	.51	.37	.61	.002	.50	.37	.60	.003
7 私は人に助けを求めることが苦手である	.43	.31	.54	.003				

	全項目				短縮版項目 ^a			
	負荷量	下限	上限	確率	負荷量	下限	上限	確率
44 たとえ本当は自信がないときでも、自力でできているように周りに見せることは重要だと思う。	.39	.27	.51	.002				
13 自分が尊敬していない人に、胸の内で考えていることや感じていることを見せたりはしない	.35	.21	.48	.002				
随伴的自尊感情 (.98/.99)								
40 人が自分の存在に気がついてくれないと、がっかりしてしまう	.78	.72	.84	.003				
36 他の人が自分のことが好きだと分かるまでは、自分になかなか満足できない	.73	.67	.79	.002	.76	.70	.82	.003
30 他の人から自分が尊敬されていると感じられていないと、自分にあまり満足できない	.71	.63	.77	.003	.70	.62	.77	.003
16 他の人が自分に注目してくれないと、自分がいらぬ人間のように感じられてくる	.71	.63	.76	.004				
32 みんな私に興味がないのではないかと、つい気になってしまう	.70	.62	.75	.003	.70	.61	.76	.002
47 周りの人の反応が私の期待していたものと違っていると、自分に自信がなくなってくる	.70	.62	.75	.003				
8 人が自分に注意を向けてくれないと、自分が嫌になる	.68	.59	.74	.003	.65	.55	.71	.003
48 私は他の人に自分を認めてもらう必要があると思っている	.65	.56	.74	.003				
41 他の人の成功をねたましく思っている自分に、よく気づく	.61	.52	.68	.004				
19 私の存在価値を認めてくれるような重要な人が、自分の人生には必要だと思うことがある	.43	.33	.53	.001				
2 私の自信は非常に揺れ動きやすい	.38	.27	.48	.002				
5 ひとりきりでいるのは、あまりいい気分ではない	.34	.23	.44	.002				
脱価値化 (.77/.79)								
34 私がしてあげたことが感謝されないのではないかと、人を避けてしまうことがある	.79	.72	.83	.004	.82	.74	.86	.004
27 自分の期待通りにしてくれないかもしれないので、人を避けることがある	.78	.71	.84	.003	.79	.71	.85	.003
17 人に期待してもその相手はどうせ応えてくれないのではないかと心配で、人とのふれあいを避けることがある	.75	.67	.81	.003	.74	.66	.81	.003
21 人が私の期待に答えてくれなかったとき、そう期待していた自分が恥ずかしくなる	.61	.50	.70	.002	.56	.46	.65	.003
51 期待するもの全てが人から得られるわけではないと思い知るくらいなら、ひとりであるほうが気楽に感じる事がある	.53	.41	.63	.002				
3 人が自分の期待に答えてくれなかったとき、期待していた自分が恥ずかしいと思うことがある	.49	.37	.59	.003				
24 人が自分の期待通りにならない時は、自分のほうを責めてしまう	.38	.25	.50	.002				

注) 上限値と下限値はバイアス修正済み信頼区間 (95 %) による。各下位因子名に付記された括弧内の値は各高次因子への負荷量 (全項目版/短縮版) を示す。

^a 負荷量等が追加で示された 28 項目が短縮版を構成する項目である。

Table 3

Wright et al. (2010) に基づく 3 モデルの適合度の比較

	df	χ^2	CFI	RMSEA	(90% CI)	AIC
モデル 1	1267	3470.95	.770	.0660	(.068-.063)	3692.95
モデル 2	1266	3465.41	.771	.0660	(.068-.063)	3689.41
モデル 3	1266	3448.05	.773	.0660	(.068-.063)	3672.05

信頼性と妥当性の検証

信頼性と妥当性に関する分析の結果は、以下と Table 4 に示したとおりであった。

再検査信頼性 約 2 ヶ月の間隔を空けての再検査信頼性については、PNI-J 全体で $r = .61$ 、誇大性と脆弱

性でそれぞれ $r = .56$ 、 $r = .64$ であった。7 下位尺度については $r = .55$ — $.68$ であり、全体的にやや低い値ではあったが許容できる値と判断した。

既存の自己愛尺度との関連 PNI-J と NPI の全体得点は、正の関連 ($r = .46, p < .01$) を示すことが確認された。特に、PNI-J の誇大性得点と NPI の正の関連が顕著 ($r = .61, p < .01$) であることは、両者が自己愛の誇大性を反映していることから考えても妥当な結果であると言える。また中山・中谷 (2006) の誇大性尺度は、PNI-J の脆弱性得点よりも誇大性得点とより強く関連し (それぞれ $r = .15, ns$; $r = .50, p < .01$)、評価過敏性尺度が PNI-J の誇大性よりも脆弱性とより強く関連を示した (それぞれ $r = .36, r = .66$ 、いずれも

Table 4
PNI の各得点の再検査信頼性と各変数との関連

	N	PNI 全体	誇大性	脆弱性	随伴的 自尊感情	権威的 脱価値化	憤怒	搾取性	誇大空想	自己隠蔽	自己犠牲 的自己 高揚
検査 —再検査	158	.61 (.58)	.56 (.51)	.64 (.61)	.60 (.60)	.64 (.59)	.58 (.47)	.64 (.62)	.55 (.48)	.68 (.67)	.57 (.52)
NPI	402	.46 (.45)	.61 (.57)	.32 (.28)	.36 (.33)	.13 (.13)	.36 (.40)	.59 (.55)	.45 (.35)	.11 (.06)	.45 (.42)
誇大性 (中山・中谷)	199	.31 (.33)	.50 (.46)	.15 (.15)	.16 (.15)	.00 (.02)	.28 (.35)	.57 (.52)	.42 (.34)	-.02 (-.05)	.21 (.22)
評価過敏性 (中山・中谷)	199	.61 (.57)	.36 (.33)	.66 (.64)	.65 (.56)	.56 (.59)	.47 (.46)	.02 (.02)	.45 (.43)	.39 (.42)	.33 (.31)
自尊感情	203	-.20 (-.20)	.05 (.02)	-.30 (-.32)	-.24 (-.23)	-.40 (-.36)	-.16 (-.14)	.39 (.37)	-.14 (-.22)	-.26 (-.34)	.00 (-.03)
恥感情	203	.36 (.36)	.14 (.14)	.42 (.45)	.39 (.37)	.44 (.44)	.31 (.30)	-.22 (-.21)	.28 (.32)	.30 (.42)	.13 (.12)
自己価値の 随伴性	203	.51 (.48)	.34 (.33)	.53 (.50)	.58 (.53)	.38 (.39)	.47 (.42)	.03 (.03)	.32 (.29)	.31 (.36)	.40 (.39)
仮想的 有能感	203	.31 (.31)	.20 (.22)	.33 (.32)	.28 (.29)	.24 (.28)	.39 (.35)	.25 (.26)	.05 (.04)	.17 (.14)	.24 (.23)
攻撃性	199	.26 (.24)	.14 (.16)	.29 (.25)	.17 (.09)	.20 (.23)	.43 (.36)	.03 (.05)	.22 (.26)	.15 (.11)	.03 (.04)
マキャベリア ニズム	199	.12 (.09)	-.08 (-.09)	.21 (.21)	.08 (.06)	.18 (.21)	.24 (.19)	-.09 (-.06)	.00 (-.01)	.25 (.19)	-.12 (-.15)
サイコパシー	199	.36 (.39)	.32 (.31)	.33 (.38)	.22 (.24)	.26 (.29)	.43 (.45)	.23 (.22)	.37 (.36)	.18 (.21)	.12 (.12)
二分法的思考	203	.32 (.32)	.27 (.26)	.31 (.32)	.30 (.31)	.23 (.23)	.27 (.30)	.10 (.09)	.26 (.24)	.21 (.23)	.23 (.23)
外向性	203	-.13 (-.15)	.03 (.00)	-.19 (-.23)	-.08 (-.14)	-.27 (-.28)	-.13 (-.11)	.30 (.27)	-.14 (-.20)	-.26 (-.25)	.03 (-.01)
協調性	203	-.22 (-.23)	-.11 (-.10)	-.25 (-.27)	-.24 (-.24)	-.23 (-.29)	-.27 (-.26)	.04 (.05)	-.17 (-.16)	-.05 (-.12)	-.07 (-.07)
勤勉性	203	-.03 (-.02)	.01 (.00)	-.04 (-.04)	-.05 (-.01)	-.10 (-.07)	-.01 (.00)	.29 (.27)	-.17 (-.25)	.02 (-.05)	.04 (.06)
神経症	203	.23 (.21)	.03 (.05)	.30 (.28)	.25 (.25)	.32 (.28)	.30 (.25)	-.16 (-.14)	.10 (.14)	.14 (.18)	.06 (.09)
開放性	203	.05 (.05)	.16 (.16)	-.02 (-.02)	-.03 (-.04)	.00 (.00)	.05 (.08)	.27 (.29)	.08 (.02)	-.10 (-.12)	.07 (.06)

注) PNI = Pathological Narcissism Inventory; NPI = Narcissistic Personality Inventory. カッコ内の数値は短縮版 PNI の分析結果を示す。1% 水準で有意な係数を太字で示す。

$p < .01$)。これも予測に一致した結果であり、PNI-J の誇大性と脆弱性の各側面が独立した特徴を持っていることが確認された。

自己に関する感情との関連 PNI-J の全体得点は、自尊感情と負の関連 ($r = -.20, p < .01$)、恥の感情と正の関連 ($r = .36, p < .01$) を示すことが確認された。な

お NPI とこれらの変数との相関を別途算出したところ、自尊感情と正の関連 ($r = .43, p < .01$)、恥の感情と負の関連をする傾向 ($r = -.12, p < .10$) が示された。自己に関する感情という点では、PNI-J と NPI の相違性が見られ、Pincus et al. (2009) と同様のパターンが確認できたと言える。また、自己価値の随伴性と仮想

的有能感は、PNI-J 全体得点と有意な関連を示した（それぞれ $r = .51, .31$, いずれも $p < .01$ ）ほか、それぞれ PNI-J 下位尺度の随伴性自尊感情（ $r = .58, p < .01$ ）と脱価値化（ $r = .24, p < .01$ ）と関連を示していた。これも予測に沿った結果であった。

対人関係に関する変数との関連 攻撃性は PNI-J 全体との関連（ $r = .26, p < .01$ ）に加え、権威的憤怒と関連を示した（ $r = .43, p < .01$ ）。対人操作傾向（マキャベリアニズム）は、PNI-J 全体（ $r = .12, ns$ ）とも、搾取性の下位尺度（ $r = -.09, ns$ ）とも関連は見られず、むしろ権威的憤怒（ $r = .24, p < .01$ ）や自己隠蔽（ $r = .25, p < .01$ ）などの得点と関連が見られた。攻撃性については予測にかなう結果であったが、対人操作傾向については予測に一致しない結果であった。本研究では対人操作を表すためにマキャベリアニズム尺度を用いたが、その項目が、「他人を完璧に信用すると、墓穴を掘ることになる」、「自分がした事の本当の理由は、都合がよい場合を除いて明かすべきではない」など、対人的操作傾向そのものよりも、その背景にある「利己性、道德観の欠如、希薄な対人感情、悲観的人間観」（中村他, 2012）などを表しているためと考えられる。そのため、マキャベリアニズムの尺度は、特権意識に基づいて利己的に他者を認識する権威的憤怒や、他者を容易に信頼せず自分の感情や欲求などを示さない自己隠蔽などの傾向との関連が見られたと考えられる。

パーソナリティに関する変数との関連 PNI-J 全体得点と、サイコパシーとの関連（ $r = .36, p < .01$ ）と、二分法的思考（ $r = .32, p < .01$ ）との関連が確認された。いずれも予測に沿った結果であり、パーソナリティの問題や障害の傾向との関連が確認された。また Big Five 特性との関連から、PNI-J の全体的な特徴が明らかとなった。PNI-J 全体得点としては、協調性の低さ（ $r = -.22, p < .01$ ）と神経症傾向の高さ（ $r = .23, p < .01$ ）が特徴として示された。誇大性得点については、Big Five との関連はあまり顕著ではなかった。脆弱性得点については、外向性の低さ（ $r = -.19, p < .01$ ）と協調性の低さ（ $r = -.25, p < .01$ ）、神経症傾向の高さ（ $r = .30, p < .01$ ）が特徴的であった。DSM に記されている自己愛性パーソナリティ障害の診断基準は、誇大性を中心とした人物像となっており、外向性の高さと協調性の低さがその特徴であると言われるが（Saulsman & Page, 2004）、PNI は若干異なるパーソナリティ像を反映していると考えられる。PNI は、DSM の診断基準や NPI の項目が反映するような顕在的・外面的に表れやすい特徴だけではなく、より潜在的・内面的なレベルでの心的過程を反映しているとも考えられる。

短縮版について

これらの結果を踏まえて先行研究（Schoenleber et

al., 2015）と同じ 28 項目で短縮版尺度（B-PNI-J）を構成し、先述のモデル 3 を用いた同様の手順で確認的因子分析を実施した。その結果を Table 2 に追記した。適合度については、 $\chi^2 = 916.45$, GFI = .853., AGFI = .826, NFI = .822, CFI = .879, RMSEA = .065 (.070; .060) であった。やや低い値であったが、全項目版よりは若干良い適合を示した。再検査信頼性については、全項目版に比してやや数値が低くなっていた（ $r = .47-.67$ ）。測定の信頼性という点では全項目版のほうがやや優れていると言えよう。

あわせて短縮版の各得点と各変数の相関を算出し、Table 4 に追記した。おおよそ全項目版と同様の相関パターンが確認できた。なお、全項目版と短縮版の各得点の相関は、PNI 全体合計得点 $r = .98$, 誇大性得点 $r = .98$, 脆弱性得点 $r = .97$ であり（ $N = 403, p < .01$ ）、その他 7 つの下位尺度でも $r = .92-.97$ と高い値を示していた。いずれの結果からも、短縮版において全項目版と同様の特徴を持った妥当な測定がなされていることが示された。

結 論

以上のように、概ね理論的予測にかなう結果が得られたことから、PNI-J が一定の信頼性・妥当性を持った尺度であることが示されたと言えよう。特に、自尊感情と正の関連を示さないと同時に、最も一般的な自己愛の尺度である NPI とは正の関連を示したという結果は特徴的であった。近年、うつ病や依存や摂食障害など、様々な病理的問題との関連が論じられる「恥」（Dearing & Tangney, 2011）と関連が見られたことも含め、自己愛の「病理」に焦点化した PNI の特徴を明確に示したものと言える。NPI が表わす「ナルシスト」の人物像は、典型的で顕在的な自己愛的特徴を示しているが、PNI は個人の内的な空想や特権意識など、より繊細で潜在的な自己愛的特徴も反映していると言える。PNI を用いることで、暴力やいじめ加害など、誇大性や自己中心性の側面から解釈されがちな問題に関しても、その背景に、繊細な自己愛的な脆弱性が潜んでいる可能性について、あらためて検証が可能になるであろう。またわが国では、引きこもりや対人恐怖など、自己抑制的・自己消去的な問題についても「自己愛」という視点で論じられることが多い（蔵本, 2002; 岡野, 1998）。PNI を用いることで、こうした自己抑制的な問題の背景にも、特権意識に基づく怒りや、期待に添わない他者に対する脱価値化など、自己愛的な葛藤がある可能性を検証できるかもしれない。

そして、Schoenleber et al. (2015) と同様の項目で作成した短縮版である B-PNI-J については、全項目版とはほぼ同様の性質を持っていることが、相関パターン等の結果から示された。信頼性に関する解釈には一定の慎重さが求められるものの、28 項目という全項目

版の半分に近い項目数で測定が可能なことは実用上の利点となる。今後の質問紙研究や臨床研究で用いられ、多角的な知見が蓄積されることが期待される。

なお、本研究の結果にはいくつかの課題が残されている。因子分析の適合度指標があまり高い値ではないことについては、他のサンプルに対する調査や、異なる因子モデルについて検討する余地が残るであろう。また、マキャベリアニズムとの関連など、予測に一致しなかった結果については、理論的予測や測定手法をより精緻化させた検証が必要であろう。各下位尺度の特徴についても詳細な検討を加える余地が大きい。

そして本研究では、臨床群データが含まれておらず、また抑うつや自傷行為のような直接的に臨床上の問題となる変数との関連も未検討である。PNIは臨床的な応用を視野に入れた尺度であるが、PNI-Jにおいても、これらは検討すべき課題である。さらなるデータの蓄積により、PNIに関する知見が拡大し、自己愛と言う観点から様々な問題に対する考察が加えられることが期待される。

利益相反

なお、本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

- American Psychiatric Association. (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorder* (5th ed.). Washington, DC: American Psychiatric Association.
- 安藤 明人・曾我 祥子・山崎 勝之・島井 哲志・嶋田 洋徳・宇津木 成介・坂井 明子 (1999). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, 70, 384-392. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.70.384>
- Besser, A., Zeigler-Hill, V., Pincus, A. L., & Neria, Y. (2013). Pathological Narcissism and Acute Anxiety Symptoms After Trauma: A Study of Israeli Civilians Exposed to War. *Psychiatry: Interpersonal and Biological Processes*, 76, 381-397. <https://doi.org/10.1521/psyc.2013.76.4.381>
- Buss, A. H., & Perry, M. (1992). The aggression questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 452-459.
- Cain, N. M., Pincus, A. L., & Ansell, E. B. (2008). Narcissism at the crossroads: Phenotypic description of pathological narcissism across clinical theory, social/personality psychology, and psychiatric diagnosis. *Clinical Psychology Review*, 28, 638-656. <https://doi.org/10.1016/j.cpr.2007.09.006>
- Caligor, E. (2013). Narcissism in the Psychodynamic Diagnostic Manual. In J. S. Ogronczuk (Ed.), *Understanding and treating pathological narcissism*. (pp. 63-79). Washington, DC: American Psychological Association. <https://doi.org/10.1037/14041-004>
- Cheek, J., Kealy, D., Joyce, A., & Ogronczuk, J. (2018). Interpersonal problems associated with narcissism among psychiatric outpatients: A replication study. *Archives of Psychiatry and Psychotherapy*, 20, 26-33. <https://doi.org/10.12740/app/90328>
- Christie, R., & Geis, F. L. (1970). *Studies in Machiavellianism*. New York, NY: Academic Press.
- Cleckley, H. (1976). *The mask of sanity* (5th ed.). St. Louis, MO: Mosby.
- Dawood, S., & Pincus, A. L. (2018). Pathological narcissism and the severity, variability, and instability of depressive symptoms. *Personality Disorders: Theory, Research, and Treatment*, 9, 144-154. <https://doi.org/10.1037/per0000239>
- Dawood, S., Schroder, H. S., Donnellan, M. B., & Pincus, A. L. (2018). Pathological Narcissism and Nonsuicidal Self-Injury. *Journal of Personality Disorders*, 32, 87-108. <https://doi.org/10.1521/pedi.2017.31.291>
- Dearing, R. L., & Tangney, J. P. (Eds.). (2011). *Shame in the therapy hour*. American Psychological Association.
- Ellison, W. D., Levy, K. N., Cain, N. M., Ansell, E. B., & Pincus, A. L. (2013). The impact of pathological narcissism on psychotherapy utilization, initial symptom severity, and early-treatment symptom change: A naturalistic investigation. *Journal of Personality Assessment*, 95, 291-300. <https://doi.org/10.1080/00223891.2012.742904>
- Gabbard, G. O. (1989). Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, 53, 527-532.
- Gosling, S. D., Rentfrow, P. J., & Swann, W. B. (2003). A very brief measure of the Big-Five personality domains. *Journal of Research in Personality*, 37, 504-528. [https://doi.org/10.1016/S0092-6566\(03\)00046-1](https://doi.org/10.1016/S0092-6566(03)00046-1)
- Harder, D. H., & Zalma, A. (1990). Two Promising Shame and Guilt Scales: A Construct Validity Comparison. *Journal of Personality Assessment*, 55, 729-745. <https://doi.org/10.1080/00223891.1990.9674108>
- 速水 敏彦・木野 和代・高木 邦子 (2005). 他者軽視に基づく仮想的有能感——自尊感情との比較から——感情心理学研究, 12, 43-55.
- Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K., & Tan, E.-H. (2009). Assumed-competence based on undervaluing others as a determinant of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, 5, 127-135. <https://doi.org/10.1007/bf03024950>
- Hendin, H. M., & Cheek, J. M. (1997). Assessing Hyper-sensitive Narcissism: A Reexamination of Murray's Narcissism Scale. *Journal of Research in Personality*, 31, 588-599. <https://doi.org/10.1006/jrpe.1997.2204>
- 伊藤 正哉・小玉 正博 (2006). 大学生の主体的な自己形成を支える自己感情の検討——本来感、自尊感情ならびにその随伴性に注目して——教育心理学研究, 54, 222-232.
- 蔵本 信比古 (2002). ひきこもりと自己愛——もう一つのアイデンティティ——臨床心理学, 2, 763-768.

- Levenson, M. R., Kiehl, K. A., & Fitzpatrick, C. M. (1995). Assessing Psychopathic Attributes in a Noninstitutionalized Population. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 151-158. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.68.1.151>
- Ménard, K. S., & Pincus, A. L. (2012). Predicting Overt and Cyber Stalking Perpetration by Male and Female College Students. *Journal of Interpersonal Violence*, 27, 2183-2207. <https://doi.org/10.1177/0886260511432144>
- 中村 敏健・平石 界・小田 亮・齋藤 慈子・坂口 菊恵・五百 部裕…長谷川 寿一 (2012). マキャベリアニズム尺度日本語版の作成とその信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 20, 233-235.
- 中山 留美子・中谷 素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達の变化的検討 教育心理学研究, 54, 188-198.
- 大西 将史 (2008). 青年期における特性罪悪感の構造——罪悪感の概念整理と精神分析理論に依拠した新たな特性罪悪感尺度の作成—— パーソナリティ研究, 16, 171-184.
- 岡田 涼 (2009). 青年期における自己愛傾向と心理的健康——メタ分析による知見の統合—— 発達心理学研究, 4, 428-436.
- 岡野 憲一郎 (1998). 恥と自己愛の精神分析 岩崎学術出版社
- 小塩 真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- Oshio, A. (2012). An all-or-nothing thinking turns into darkness: Relations between dichotomous thinking and personality disorders. *Japanese Psychological Research*, 54, 424-429. <https://doi.org/10.1111/j.1468-5884.2012.00515.x>
- 小塩 真司・阿部 晋吾・カトローニ, ピノ (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み パーソナリティ研究, 21, 40-52.
- 大隅 尚広・金山 範明・杉浦 義典・大平 英樹 (2007). 日本語版一次性・二次性サイコパシー尺度の信頼性と妥当性の検討 パーソナリティ研究, 16, 117-120.
- Paradise, A., & Kernis, M. H. (1999). *Development of the contingent self-esteem scale* (Unpublished data). University of Georgia, Athens, Georgia.
- Paulhus, D. L., & Williams, K. M. (2002). The Dark Triad of personality: Narcissism, Machiavellianism, and psychopathy. *Journal of Research in Personality*, 36, 556-563. [https://doi.org/10.1016/S0092-6566\(02\)00505-6](https://doi.org/10.1016/S0092-6566(02)00505-6)
- Pincus, A. L. (2013). The Pathological Narcissism Inventory. In J. Ogrudniczuk (Ed.), *Understanding and treating pathological narcissism* (pp. 93-110). Washington, DC: American Psychological Association.
- Pincus, A. L., Ansell, E. B., Pimentel, C. A., Cain, N. M., Wright, A. G. C., & Levy, K. N. (2009). Initial Construction and Validation of the Pathological Narcissism Inventory. *Psychological Assessment*, 21, 365-379. <https://doi.org/10.1037/a0016530>
- Raskin, R. N., & Hall, C. S. (1979). A Narcissistic Personality Inventory. *Psychological Reports*, 45, 590-590. <https://doi.org/10.2466/pr0.1979.45.2.590>
- Ronningstam, E. F. (2005). *Identifying and Understanding the Narcissistic Personality*. New York: Oxford University Press.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Saulsman, L. M., & Page, A. C. (2004). The five-factor model and personality disorder empirical literature: A meta-analytic review. *Clinical Psychology Review*, 23, 1055-1085. <https://doi.org/10.1016/j.cpr.2002.09.001>
- Schoenleber, M., Roche, M. J., Wetzel, E., Pincus, A. L., & Roberts, B. W. (2015). Development of a brief version of the pathological narcissism inventory. *Psychological Assessment*, 27, 1520-1526. <https://doi.org/10.1037/pas0000158>
- Sedikides, C., Rudich, E. A., Gregg, A. P., Kumashiro, M., & Rusbul, C. (2004). Are normal narcissists psychologically healthy? Self-esteem matters. *Journal of Personality and Social Psychology*, 87, 400-416. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.87.3.400>
- 豊田 秀樹・真柳 麻誉美 (2001). 繰り返し測定を伴う実験のための因子分析モデル 行動計量学, 28, 1-7.
- Tritt, S. M., Ryder, A. G., Ring, A. J., & Pincus, A. L. (2010). Pathological narcissism and the depressive temperament. *Journal of Affective Disorders*, 122, 280-284. <https://doi.org/10.1016/j.jad.2009.09.006>
- Trull, T. J., & Widiger, T. A. (2013). Dimensional models of personality: the five-factor model and the DSM-5. *Dialogues in Clinical Neuroscience*, 15, 135-146.
- Wright, A. G. C., Lukowitsky, M. R., Pincus, A. L., & Conroy, D. E. (2010). The higher order factor structure and gender invariance of the pathological narcissism inventory. *Assessment*, 17, 467-483. <https://doi.org/10.1177/1073191110373227>
- 山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

—— 2019. 9. 6 受稿, 2020. 9. 26 受理 ——